令和３年度上越市・妙高市在宅医療・介護連携推進協議会

第３回対人援助スキルアップ部会を開催しました

日時：令和４年２月 15 日（火）
開催方法：ZOOM オンライン
参加者：部会メンバー８名
　　在宅医療推進センター
　　コーディネーター１名
　　事務局４名　計 13 名

○第３回部会では、1/19 部会長・副部会長会議報告や職能団体等における研修開催報告のあと、今回も事例検討を行い、支援のあり方や対人援助スキルについて意見交換を行いました。

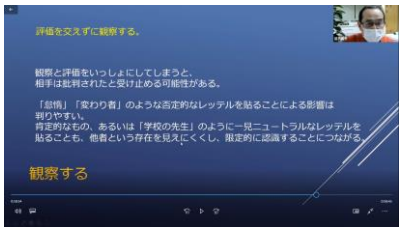
○職能団体等への研修開催状況
①在宅歯科医療連携室での研修
②妙高市介護支援専門員対象の研修
③リハ職有志の会での研修計画中

事例検討

【事例の概要】事例提供：清水副部会長
- 80 代後半男性一人暮らし。要支援１。
- 県外在住の一人息子が滞在し支援。家事支援のニーズがある。
- 息子が強くサービス利用を求める一方、本人の意向・本音が見えない状況である。

【事例を聞いての感想・意見】
- 低栄養が予測される。その背景には認知機能や妻との死別による意欲低下が考えられる。
- 食欲低下の要因に、口腔機能低下が考えられる。噛めているのか、飲み込みができているのかなど、口腔内の状況も評価していけるとよい。
- 長男は父親を「何もできない」と決めている。長男の価値観を押し付けている印象がある。
- 認知機能が低下すると自分がどうしたいかを言語化することが難しくなる。具体的な方法を示し、選択してもらうことも必要。
- 妻を亡くした本人の思いに寄り添い、急がせない関わり方も必要。
- 妻との思い出の写真を見ながら話をするのはどうか。
- 50 年ぶりに生活を共にする親子は 50 年前の二人の関係あるいは親の対応が現在につながっている可能性がある。
- 「仕事ができるお父さん」でも生活力がない人はいる。息子の焦りを感じる。
- 素直な感情を表出しないことを「普通」と思う世代。コミュニケーションのとり方に工夫が必要。

【揚石先生からの講話】



- 1、２回目の部会を振り返っていただき、その後、「家族への支援」「言葉の大切さ」について講話をいただきました。
- 相互を思いやり、評価を交えずありのままを観察すること、潜在的な感情をすくいとることなどのメッセージをいただきました。

★今後も本人・家族と向き合う姿勢、思いを引き出せる対人援助スキルアップを目指します。

★次年度に向けては、部会内での研修のほか、外部への発信を計画的に実施していきたいと思います。